

---

# 江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

Nakazawakatsuyoshi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

### 【Zコード】

N4675BA

### 【作者名】

Nakazawakatsuyoshi

### 【あらすじ】

これから江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたりを書いて行こうと思います。初めての小説なので緊張します。これからよろしくお願いします。

## 二年生の始業式

あれから2年たつた。相変わらず毛利家では「眠りの小五郎」の評判を聞きつけ依頼人が殺到している。その都度コナンは小五郎を眠らせていた。そうしてコナンも明日から三年生。最近心配している事がある。自分の顔が工藤新一になつて来ているのだ。蘭も最近不思議そうな目で見てくるし大変だ。

次の日、始業式の朝からの校長先生の話が長くてとても疲れた。少年探偵団は奇跡的にクラスを分けらなかつた。

歩美「よかつたー。またコナン君と同じで。」

光彦「えー。なんでコナン君なんですかー。僕の方が絶対にうつー。」

光彦は元太に押された。

元太「なんでコナンなんだよー。」

光彦「元太君何すんですかー」

光彦は元太に押し返すと一人は喧嘩を始めた。コナンはその様子を見て呆れていた。

灰原「どう? 高校生探偵さん 女に好かれ、他の男がやきもち焼いているを見て?」

コナン「へつ? なんのことだ?」

灰原「あなたつて本当に鈍感なのね。」

コナン「だからなんのことだよ。」

灰原「別にー。」

コナン「チエ、なんだよ、教えてくれたつていいのによ。」

灰原「よろしくね。」

「コナン、は？」

灰原「だつてクラスまた同じじゃない。」

「コナン、ああ」

灰原「また疲れそうね。工藤君私達に事件を巻き込まないでね。」

「コナン、わりかつたな。」

歩美「ちょっとコナン君、哀ちゃん、一人だけでコソコソしゃべらないの。」

光彦「そうですよー。私達は五人で少年探偵団なんですから。」

やがて三人とわかれ、灰原とコナンの二人でかえつていた。

灰原「まったく疲れるわー。校長先生の話」

「コナン、確かにあれはなげーよな。」

すると、いきなり灰原の顔が暗くなつた。

灰原「まあ、もう少しでこの生活から抜け出せるだらうナビ。」

「コナン、ん？ それどういう意味だ？」

「灰原、解毒剤が完成したのよ。」

「コナン、ほつ本当か？」

灰原「工藤君！ 嘉んではいられないわよ。まさか組織のこと忘れてないでしちゃうね。」

「コナン、ああ、わかつてるよ。」

よつしゃー！ コナンは心の中で思つていた。

## 灰原とコナンの心情

その日、彼とわかれた後灰原はパソコンで解毒剤の資料の整理をしていた。

（もし、工藤君と私が元の姿に戻つたらどうなるのかしら？吉田さん達は私をどう思つたら？蘭さんは私をどう思つたら？そして彼は…？）

「よつ灰原！」

灰原「えつ？」

コナン「俺だよ」

灰原「あなたいつからここに？」

コナン「さつきからずつといたぜ。気づかなかつたのか？」

灰原「ええ。考え方してて。つてあなた何人の部屋勝手に入つてるのよ。」

コナン「お前はさ、一人で考えすぎなんだよ。たまには俺とかに相談してくれたつていいんだぜ。」

灰原「いいのよ。これは自分のことだから。」

コナン「お前かわいくねえなー。」

灰原「かわいくなくつていいのよ。」

コナン「まつそこがかわいいんだけどな。」

灰原「えつ？」

コナン「いついや、なんでもねえよ。」

灰原「あらそう。」

灰原の顔がまた少し暗くなつた。それに勘付いたコナンが  
「お前さ、動物好きだよな。」

灰原「ええ。」

コナン「今度さ、いつしょに動物園行こうぜ。」

灰原「無理よ。私土日あいてないし。」

コナン「平日でいいじゃねいか。俺ら学校いかなくて内容わかる

だろ？たまにはいいだろ？」

灰原「それもそうね、付き合つてあげようかしら。」

コナン「本当にかわいくねえなー。」

言つてから、しまつた、と思つたが灰原が明るくなつてホッとした。  
(なんで俺がこいつの事ここまで気にしてるんだよ。)  
自分でもわからなかつた。

コナンが帰つたあと灰原はとても機嫌がよかつた。博士は何があつたのだろうと首をかしげていた。

帰宅途中コナンはやつきの気持ちについて考えていた。

(どうしたんだらうな、俺)

そう思つてみると、背後から気配を感じた。危険を感じ逃げたが相手の足は早く捕まつてしまい、そのまま氣絶してしまつた。

## 背後の謎の人

田が覚めると「ひまわり」やら自分の本当の家らしい。そして田の前には有希子がいた。

コナン「母さん！」

有希子「あら新ちゃんおきたの。久しぶりね。」

コナン「驚いたじゃねーか。やめろよな。こいつの。」

有希子「久しぶりに会う母親に対する挨拶にしてはそつがないじゃない。それにしても慣れてるでしょ、こいつの。」

コナン「だからって、睡眠薬でねむらせることないだろ。」

有希子「新ちゃんだって蘭ちゃんのお父さんを眠らせるじゃない。」

「コナンは返す言葉がなかつた。

（こいつにはかなわない）

そう思った。

そのとき

有希子「新しい恋人さん見つけたそうじゃない。」

コナン「違う違う、いくら動物園にいっしょに行くからって灰原と恋人なんかじや…。」

有希子「あら？ 私哀ちゃんなんてひと言も書いてないけど？」

コナン「しまつた？」

有希子「そこの動物園に？ お金必要じゃない？」

コナン「いいよ。おっちゃんにもらうか。」

有希子「それじゃ悪いわよこれ持つていきなさい。」

有希子は封筒を渡した中には百万円入っていた。

コナン「こんなにいらねーよ。」

有希子「いいのよ。使わなくても持つといで。あと…これも持つといで。」

とコナンは巨大なダイヤモンドのネックレスを受け取った。

有希子「それはね私が優作に告白されたときにもうつたネックレスよ。もし理想の相手が見つかったらその人にあげて。」

コナン「いいのか?んな大事なもの。」

有希子「いいのよ。じゃ哀ちゃんと頑張って!」

コナン「だから違うって。」

そう言っても有希子は笑っているだけだった。

寝る前、有希子は飛行機のため帰った。

(俺つて灰原が好きなのか?)

(……んなわけねーか。)

明日は早いので早く寝よう。カチッ

次の日、灰原とコナンは動物園に行くことになった。場所はトロピカルランド 遊園地だが動物園もあるといつことじにした。もちろん蘭と来たことがあることは灰原には言わない。ていうか言いたくない。

コナン「相変わらず混んでるなー。」

灰原「ええ。」

それから一人はキリンや象、猿やライオンを見た。それから遊園地側のジェットコースターや観覧車、それから一番驚いたのはお化け屋敷だ。灰原はものすごく怖がりで抱きつかれてしまった。

コナン「灰原つて幽霊を信じないって言つてた割に怖がりなんだな。」

相変わらず灰原はふるえている。コナンがあきれていると。見慣れたひとがこつちに来る！

（蘭だ！）

コナン「やばいぞ！メガネ持つてねー。」

蘭「あれ？どこかで見たような？あつ！しつ新ー！」

コナン「ちつ違うよ蘭姉ちゃん。僕だよ。」

蘭「ああ、コナン君か、あら？赤ちゃんも、もしかしてデート？」  
コナンも灰原も赤くなつた。

コナン「ちつ違うつてば。」

蘭「頑張つてねコナン君ーじゃあねー！」

こつしたハプニングもあつたが無事に博士の家に着いた。

コナン「楽しかつたな」

灰原「そうね。」

灰原「私解毒剤のデータ整理してくるからゆづくらしてって。」

コナン「おーサンキュー」

自分の部屋に戻るとパソコンを立ち上げて解毒剤のデータをまとめた。すると、パソコンに信じ難いことが書いてあった。

コナンがテレビを見ていると暗い顔した灰原が来た。

灰原「今日は疲れたわ。悪いけど帰つてくれる? 夜遅いし、蘭さん心配しているでしょ?」

コナン「そうだな。今日はありがと、また明日な。」

灰原「ええ。」

毛利の家でコナンは考えていた。灰原のあの顔はなんだろう。俺はなんかしたか?

## 灰原の手紙

次の日、学校で灰原は無言になってしまった。帰りに話していくと  
きも何もしゃべらない。

歩美「哀ちゃんどうしたのかな？」

光彦「何もしゃべらないですねー。」

元太「うな重くえは大丈夫たぜ。」

光彦「それは元太君だけですよ。」

元太「なんだとー。」

歩美「まあまあ。」

コナン（確かになんで落ち込んでいるんだ？灰原。）

不具合を調整するため預けていたメガネを受け取る為博士の家にコナンは行くことになつていて。

コナン（灰原がどうして落ち込んでいるか、博士に聞くか。）

コナン「博士入るぞ。」

博士「おお新一か、わしき出かけた哀君から手紙をあずかつているよ。」

コナン「なに？」

「コナンは手紙を読んだ。」

「昨日はどうもありがとう、とても楽しかったわ。私が落ち込んで  
いる理由は動物園のことじゃないの。心配かけてごめんなさい、昨日パソコンで解毒剤の資料の整理をしていたら重大なことに気が付いてしまったの、確かにこの解毒剤で計算上私達元の姿に戻れる、でも身体が縮んだときに急激に死んだ細胞を急激に元にもどすと身

体が持たず死んでしまう、」ことを計算にいれてなかつた、私のミスだわ、もうあなたと会うこともないでしょう。最後に一つだけ聞いて欲しいことがあるの。私はあなたのことが好きだった、さようなら。あなたを元に戻せなくてごめんなさい。」

コナンは手紙を読みおわり、

コナン「博士！俺のメガネをかしてくれ。」

博士「わかつたがどんな内容だったんじや？」

コナン「話は後だ、灰原が生きて戻つたらはなしてやる。」

モーターボードに乗りメガネのレーダーで灰原の探偵バッジを見つける。

コナン「学校だな間に合ってくれ。」

## コナンの告白

灰原は学校の屋上にいる。

灰原「私ってダメね、私が頼つたせいでお姉ちゃんは死んでしまつて、工藤君を工藤君の身体に戻れなくしてしまつて。ありがたいことは死んだら自分を思つてくれる人がいないこと。周りに迷惑掛けずに入れるんですもの。組織の倉庫で死ぬよりよっぽどいいわ。欲をいえば最後に工藤君に会いたかった。」

灰原は屋上のフェンスをこえ飛び降りようとしたとき。

コナン「死んだら自分を思つてくれる人がいないだと? 周りに迷惑がかからないだと? ふざけるな。」

灰原「工藤君!」

コナン「そこまで考えているなら、生きるよ。生きて償えよ。おまえの薬で死なせたぶんだけ生きろよ。」

灰原「なんであなたはそう優しいの? 何人も殺した私を優しくしてくれるの?」

コナン「それは…お前が好きだからだ。」

灰原「えつ?」

コナン「ほら、お前のことを思つている人はいるぞ。」「ほら、ほら、いつまでもそんなところにいんなよな。」

灰原はうなずいてこっちに来た。

コナン「ほらこれ、お前にやるよ。俺からの愛の印だ! だから絶対死のうとか考へるな。お前が死んで迷惑掛かる人はたくさんいるんだぜ。」

灰原は渡されたものに驚いた、巨大なダイヤモンドのネックレスだつたからだ。

コナン「どうだ?」

灰原「嬉しい!」

そのときの灰原の笑顔はとても美しかつた。

灰原「みんなには「」」であつたことは秘密にしておいて。」

コナン「わかつた」

コナン「博士が待つてゐる、はやく帰らひやせ。」

灰原「うん！」

そのときの灰原の涙はダイヤモンドと同じように輝いていた。

## 歩美の心

光彦「灰原さん明るくなりましたねー。」

元太「うな重食つたんだよな?」

歩美「そんな元太君じやあるまいし。」

灰原「本当にみんな心配かけてごめんなさい。でも特に何もなかつたわよ。ね? 江戸川君?」

コナン「え? あつああ。」

歩美の顔が暗くなつた。

歩美「そうなんだ…」コナン君は哀ちゃんが暗かつた理由しつてんだ

…

コナン「だつだからなんでもないつて、な? 灰原。」

灰原「ええ。」

歩美の顔が元に戻つた。

歩美「そつか、そよね、安心した。」

コナン「なにが?」

歩美「うつと、なんでもないの、気にしないで。」

灰原「ところで、今度の日曜日、博士がキャンプする? って言つて  
いるんだけど?」

歩美、光彦、元太「いくいく!」

コナン「こないだ土日空いてないつていつてたじやねーか。」

灰原「嘘よ。学校めんどくさかつたから、平日動物園にいくよつてしまだけよ。」

コナン「お前なー。」

歩美「ふーん、哀ちゃんとコナン君こないだ動物園にいつてたんだ

…

歩美の顔がまた暗くなつた。

キャンプにはコナン、灰原、歩美、光彦、元太、蘭、博士と行くこ

とになつた。

キャンプ場に着くとテントをはつた。みんながテントをはるなかで

灰原とコナンは川にいた。

コナン「きれいな川だな。」

灰原「ありがとね。」

コナン「ん?」

灰原「あなたがあの時来てくれなかつたら、私いないんですけどものね。」

コナン「誰にだつてあるさ、弱気な時つてのは、問題はどういえていくかだな。」

灰原「一人でこえられないなんて私弱いのね。」

コナン「そんなことないぜ、お前が誰より強いってことは知つてゐるぜ、それに…」

灰原「それに?」

コナン「こえられない時は俺が守つてやるから。」

灰原「ありがとう、工藤君」

(工藤君? 誰よそれ?)

気がづくと一人がいないので、一人を探していた歩美が話を隠れて聞いていた。

(やっぱり哀ちゃんが暗い理由、コナン君は知つているんだ… てことは「一人は…」)

歩美は泣きそうになりながら張り終えたテントに戻つた。戻つてきた歩美の異変を感じた光彦は

「どうしたんですか?」

と聞く、しかし歩美は

「つうん、なんでもないの。」  
とテントの中で泣いていた。

## 蘭の疑惑

その日の夜、歩美は蘭に聞いて欲しい」とあると話しかけていた。  
歩美「歩美は前に「コナン君が好きだつて言つたでしょ? その」と  
でなんだけど。」

蘭「それでコナン君がどうかしたの?」

歩美「あのね、私みんながテント張つている時哀ちゃんとコナン君  
がいなかつたから心配で探しに行つた。そしたら川の前で一人が  
話していたの。一人の話を聞いているとなんだか深刻そうな話だか  
ら、話かけられなくて、一人ともまるで大人みたいな口調で私入り  
込む隙がなかつた、コナン君は哀ちゃんのことが好きなのかな?」

蘭「どうかな、わからないけど、でもたとえコナン君が哀ちゃんの  
ことが好きでも、まだ小学生なんだから大丈夫よ、これからどうな  
るかわからないし。」

歩美「違うもん! 哀ちゃんがね、コナン君の」と愛称で呼んでたも  
ん。」

蘭「なんて呼んでたの?」

歩美「工藤君つて。」

蘭「! ? なつなんで。」

歩美「知らないけどそうよんでもん。」

蘭「大丈夫よ、愛称で呼んでるからつて好きだからなんてわからな  
いし、歩美ちゃんもつと自信をもつて!」

歩美「そうだよね。私頑張つてみる!」

歩美はそういうと布団のを被つた。

歩美「おやすみなさい。」

蘭「おやすみなさい。」

蘭は哀ちゃんの言つている「工藤君」のことを考えていた。  
(もしかしてコナン君は新一のかしら。重要なことで私にそのこ  
とを言えない事情があるとしたら? 最近顔が新一に似て来てるし...)

自信持つてつて言った私が「んなに悩んでどうするのかしら？」

次の朝、蘭はコナンに聞いてみた。

蘭「新一？」

コナン「なんだ？ 蘭」

言つてからしまつたと思い、慌てて付け加えた、

コナン「なーんちゃつて、はははは。」

蘭（怪しいわね。）

灰原が耳元で言つた。

灰原「ちょっと藤君、あんたなにやつてるの。ばれちゃいけない  
のよ。」

コナン「わかつてゐるさ、でも今の蘭、わざとらしくねえか？」

灰原「そうね、勘付かれてるかもね。気をつけなさいよ。」

「コナン「わかつてゐるよ。」

その後のキャンプは元太が火遊びして怒られた以外無事に終わつた。  
そしてコナンはあることを決心した。

## 蘭の疑惑（後書き）

コナンが告白したのに、恋愛描写が無くてすみません。次からぼちぼち入れます。

コナンにとつて人生二度目の小学校の修学旅行だ。場所は京都、コナンは事件などで何度も訪れたところなのではつきり言って暇だつた。それに対し灰原は三年生の時外国にいて、行つていない、しかも東洋人ということでいじめられていたので彼女にとつては初めての友達との修学旅行だつた。

コナン「ああーつまんね。」

灰原「あら、そうかしら、私は結構楽しみだけど。」

コナン「まあ、お前と部屋同じだからな。」

三年生だと性的意識がないのでお風呂以外は全て男女合同だつた。

灰原「工藤君、変なことしないでよ。」

コナン「バー口一、誰が三年生の体見て喜ぶかつてんだ、ロリコンじゃあるまいし。」

灰原「その三年生のことが好きなの誰だつけ?」

コナン「なつなんだよ。」

灰原「冗談よ、冗談。」

灰原「工藤君?」

コナン「あん?」

灰原「私決めたの、このままの体で暮らして行こうつて。」

コナン「でもパスポーツとかどうすんだよ、海外にいけないぜ。」

灰原「そんなことしなくても暮らしていけるわよ。この体の方が組織にばれにくいし。」

コナン「そうか…」

灰原「しつ心配しないであなたの解毒剤は作るから。」

しかし、内心不安だつた。あの解毒剤の失敗からあまり自信がなくなつて來た。もしかしたら作る気がないのかもしれない。(なぜ?)

灰原「そんなの知らないわよ。」

「コナン、えつ？ 何が？」

灰原「へつ？ ああなんでもないわよ。」

「コナン、そうか…」

「コナンは今はつきり見た灰原の顔が曇つたのを

（またなんか考へてるな）

だか何を考へているかわからなかつた。コナンはそういうところは鈍感なのだ。

京都の街並は昔の街だかなんと緑色のマクドナル　の看板があつた。灰原「街並みの景観のため緑色にしたつて聞いてたけど本当なのね。この色の方が景観を乱すように見えるけど。」

「コナン、まあ、世の中単純にしか物事を考えられない奴もいるんだな。色をあわせらいといつてもんじやないぜまったく。」

仲良くいっしょに並んで歩いている二人の様子を見て歩美は複雑な気持ちだつた。

そしてホテルに着くと班ごとにわかれて部屋に入つた。部屋の人はコナン、灰原、歩美、マリアの四人である。余つた六人部屋を四人で使うのだから広かつた。コナンは一人だけ男子なのが不服そうだつたが。

それからあつと/or/いう間に時間が過ぎ夜中の12時になつていた。灰原は夜中はパソコンで調べ物をしているので寝つきが悪かつた。ベルランダで景色を眺めていた。京都の夜風は寒いが心地よかつた。

「コナン、どうした？ 灰原。」

灰原が布団の中にいなから気になつて來たのだ。

「灰原、ちょっと眠れないだけ。」

「コナン、お前いつも解毒剤作るのにパソコンばつかやつてるからな。」

（あれ？ ベランダが開いてる。）

見回りの先生が様子を見にきた。そこに灰原とコナンがいた。

真夜中の出来事 疑惑はより現実に

灰原「ちがうわよ。」

コナン「おい、灰原。」

灰原「何かしら?」

コナン「俺もこの身体で生きていくことにする。」

灰原「えつ? 今なんて?」

コナン「俺これからもこの体で生きていくことにする。そして蘭とはきつぱりわかれること。」

灰原「なんで? それはあなた…つまり工藤新一を捨てることなのよ?」

見回りの先生(工藤新一?)

「コナン、わかつてゐるよ。でも今から戻つても存在しなかつた時間が長かつたし今頃戻れねーよ。それにさ、解毒剤作るつていう時のお前なんかくらいぜ?」

見回りの先生(解毒剤つて?)

灰原「そうね、あなたが近くに居てくれないと、確かに辛いわ。」

コナン「ちえ、それだけかよ。」

灰原「それと。」

コナン「それと?」

灰原「ありがとう!」

そう言つて灰原はコナンに抱きついた。意外な展開に見回りの先生はやつと自分の義務を思い出した。

見回りの先生「何をやつてゐのー!」

灰原とコナン「あつ。」

見回りの先生「夜中に何してゐかと思つたら、保護者に連絡しますからね。」

コナン「やばいぞ。」

見回りの先生「もしもしあつとはい、コナン君の代理の保護者でいらっしゃいますか？昨日の晚にお宅のコナン君が布団を抜け出して灰原さんと抱き合っていたんですね。」

蘭「えつ？」

見回りの先生「よく注意深くしてくださいね。後それと、灰原さんがコナン君のことを工藤新一と呼んでいたんですがこじらあたりありますか。」

蘭「いいえ。」

見回りの先生「変ですね、コナン君が灰原さんに俺これからもこの体で生きていくことにする。って言つたら灰原さんはなんで？それはあなた…つまり工藤新一を捨てるつてことなのよ？って言つてたんですけど、まあおそれらく遊びでしうね。ではくれぐれも注意しておいてくださいよ。」

蘭「はい、わかりました。」

ふーふー、電話が終わっても蘭はぼーっと立っていた。

（「コナン君が新一…」）

コナン「まつたくいきなり抱きつくなよな、見たか？先生の顔、気まずかつたぜ。」

灰原「保護者に連絡つてのまづいんじやないかしら？怒られるでしょうねあなた、蘭さんに。」

コナン「そつだつた。灰原はいいよな？怒られなきうだし。」

灰原「ふふ」

コナン「なんだよ。」

灰原「別に。」

コナン「なんだつて。」

灰原「おやすみ。」

コナン「チエ、おやすみ。」

灰原は嬉しかつた、彼が蘭とわかれると言つたため、コナンが好き

な女としてやはり蘭への嫉妬の心はあつた。

灰原「おやすみ。」

もう一度言った。しかし彼は寝ていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4675ba/>

---

江戸川コナンと灰原哀の恋愛ものがたり

2012年1月14日21時48分発行